

# 「非教材」としての郷土芸能 —小学校における音楽活動の在り方について—

教科・領域教育専攻  
芸術系コース（音楽）  
宮川 伸江

## 1. 研究の目的

郷土芸能を学校教育に取り入れる研究は、最近多くみられる。しかし、郷土芸能学習を展開する場合、学校は教材として、地域は伝承活動の一環として据える傾向が強い。そのため、学校と地域のねらいの差異が生じ、目標の定まらない実践になってしまうのではないかと疑問に思った。また、地域に迎合し、地域の考え（主に伝承）を前面に出してしまうことは、学校の機能が成り立たない状態に陥り易いのではないだろうかと思義を抱いた。近年の郷土芸能の伝承機能が低下しているといわれている現状も踏まえると、学校と地域が、共に子どもの成長を願う目標を持って郷土芸能学習を展開することにより、更なる発展も望むことができるのではないかと考えた。そのため、学校における郷土芸能学習の実践の分析と検討を行い、学校と地域の目的が一致した実践の有効性について研究を深めた。さらに、子どもたちの成長にもたらず教育的意義と、郷土芸能のもつ本質を見出し、学校における郷土芸能を取り入れた音楽活動の在り方を研究した。

## 2. 研究の構成

### （1）研究の方法

- ・学校における郷土芸能学習の 80 の先行研究実践事例を教材、伝承の視点を中心に分類した。
- ・学校における、学校と地域の目的が一致した

実践の有効性を分析した。

- ・学校教育の中で郷土芸能を取り上げる意義について概念を確立し、子どもの成長に与える意味と、小学校における郷土芸能を取り入れた音楽活動の在り方を研究した。

### （2）論文の構成

- I 序章
- II 先行研究と実践の類型化
- III 学校と地域の目的を一致させる実践
- IV 学校と地域の目的を一致させる実践の有効性
- V 終章

## 3. 研究の概要

I では、先行研究を概観し本研究の必要性を見出した。郷土芸能学習が類型化されていない現状や学校は独自のプランを持ちながらも地域の伝承者と連携を保とうとしている現状が浮き彫りとなった。地域の伝承者は子どもたちに伝承を意図して指導するが、学校の教師はそこに教育的意義を見出して目標に掲げる。そのため、II では、目標の定まらない実践が展開されている場合が多いのではないかとこの予測にもとづいて目標の洗い出しを行い、伝承に関わる能力面の目標と伝承に関わる情意面の目標に大きく分類した。その結果、能力面でも情意面でも段階を踏んで目標を設定していないことが明らかとなった。子どもに対し、郷土芸能の性急な提示が学習の混乱を招く原因になっているようにも思えた。さらに、伝承意識の実践後の変化や

深まりについても考察を行った。伝承に関する目標などが抽出されたことから 80 の先行研究実践事例を以下のような教材、伝承の視点から分類を行った。

- a. 郷土芸能の教材化を目指した実践
- b. 郷土芸能の教材化と伝承の両方を求めた実践
  - (1) 教材化の要素が強い実践
  - (2) 教材化と伝承の両方を求めている実践
  - (3) 伝承の要素が強い実践
- c. 学校が地域の伝承機能を果たしている実践

その結果、郷土芸能学習において子どもの成長や変化が置き去りにになっている傾向が見られた。「教材化」という教師の視点が、否応なしに郷土芸能を分解し、音楽的要素としての一面でしか見ることができなくなっているように受け止められた。しかし、中には郷土芸能の本質を理解させようとしている実践もみられた。

Ⅲでは、実際に活動されている地域の郷土芸能学習のフィールドワークを行った。郷土芸能の本質と学校との関わりを分析し、本研究Ⅱにおける分類方法にもとづいて、学校と地域の目標からと実践の深まりからの二つの視点で位置付けを行った。

郷土芸能学習が学校教育の中で及ぼす影響について考察するため、Ⅳでは、これまで実践されてきた郷土芸能学習の実践事例を「実践の成果」と「実践後の問題点」の視点から分類し、類型化を試みた。

「実践の成果から見た郷土芸能の本質」を以下のように見出だした。

- (a) 情意的成果・・自分自身の存在を意識
  - 地域の一員であることを確認
- (b) 能力的成果・・音楽的な感覚や技術
  - コミュニケーション力の育成
- (c) 学校で取り上げる効用・・
  - 郷土芸能の広域化、再生化

学校ではとかく教育的価値を重視しがちで、それを達成するために試行錯誤をして学習を進めてしまう。これまで伝承されてきた郷土芸能を教育的意義だけを考えて教材化をすることは、子どもたちは、郷土芸能の本質を理解しないままの状態が学習が終わってしまう恐れがあると判断した。そのため、本研究では、学校においては教育的な目的と本質的な目的の融合が望ましいと結論付けた。このような教育的な目的だけに限らない郷土芸能を「非教材」という形で学校に取り入れることにより、郷土芸能のもつ教育的価値と本質的なものが、子どもたちに身に付いていくのではないかと考える。そして、可能な限り学校と地域の目的を一致させ、学校は、教材という理念にとらわれず、郷土芸能を取り入れることが必要であるという結論に至った。

#### 4. 今後の課題

本研究は、筆者が小学校教員という立場から郷土芸能を学校側の視点から捉えて分析しているものである。敢えてこのような視点で見直すことにより、学校で取り上げることが可能な芸能の本質を抽出することができたと考えられる。しかし、郷土芸能は本来地域に存在するものであるが、ここでは、地域の視点からは分析していない。また、今回は 80 の実践事例と筆者のフィールドワークにおいて取材や経験をしたものを対象として研究したものであり、全体を捉えたものとはいえない。今後は、地域からの幅広い視点で郷土芸能の本質を考察し見出していきたい。また、郷土芸能の本質を加味し、子どもたちの成長を第一に考えた郷土芸能学習を展開していくことは、この研究の意義を実証する実践的な研究の第一歩となるのではないかと考える。

指導教官 小川 昌文